

PRAEVIDENTIA DAILY (9月19日)

昨日までの世界：縮小開始見送りで豪ドルがアウトパフォーム

注目されたFOMCでは月間850億ドルの債券購入の縮小が決定されなかったことから、米長期債利回りの急低下(10年物は終値ベースで-0.16%ポイント、一時2.67%へ低下)と共にドルが対主要通貨で全面安となった(声明文「委員会は債券購入ペース調整を開始する前に、景気回復が持続的だというより多くの証拠が出てくるのを待つことを決定した」the Committee decided to await more evidence that progress will be sustained before adjusting the pace of its purchases.)。想定通り、縮小見送りの場合の米株高も実現したことから、米国との金利差面のみならず米株価との連動性にも支えられるかたちで、豪ドルの対米ドル相場が+1.8%の大幅上昇をみせた。ドル/円も欧州時間入り後の99円割れの後、FOMC結果発表前の98.90円近辺から一時97.76円へ下落したが、前日終値から比べると-1.2%の下落に留まった。Bernanke議長は定例記者会見で年内の縮小開始は可能と述べたものの、次回会合(10月29-30日)まで時間があること、また次回は議長記者会見が予定されていないこともあって縮小開始という重要決定が行われないとみる向きも多いことから(但しこれについてもBernanke議長は臨時記者会見開催も可能と述べているが)、米経済指標面で連続して市場予想を上回る良好な結果が出てこない限り、当面98円前後で停滞するリスクが出てきた。

今回FOMCの声明文および記者会見で他に特筆すべき点は、今後の量的緩和縮小に関して、6月以降「年後半に縮小開始し、来年半ばに終了」としてきたスケジュール感について、「年後半」の部分は一応維持されたかたちだが、縮小終了の時期については触れられなかったことから、縮小開始時期のみならず、縮小終了時期も後ずれしたという認識を市場に与えたことで、ハト派的な内容と捉えられ米長期債利回りの追加的な押し下げ要因となっている。他方、景気認識には全体として明確な改善も悪化もなく、今回発表されたFed自身の経済予測ではGDP成長率予想レンジが今年・来年分が若干下方修正された一方で失業率予想は引下げられ、同時に声明文の景気判断では前回「緩やかな(modest)回復」とされた部分が「緩やかな(moderate)回復」とされるなど小幅上方修正されている。

その他、英国ではBoE議事要旨が発表され、9月3-4日会合での政策変更なしの決定が全会一致だったのは市場予想通りだったが、一段の刺激が現状で適切だと判断したメンバーは誰もいなかった、という内容がタカ派的と捉えられポンド高に繋がり、対ユーロでは一時0.8353ポンドと今年1月17日以来の高値へ上昇していた。その後のFOMC結果を受けてポンドは対ドルで続伸し1.61ドル台乗せとなったが、対ユーロではユーロ/ドルが上昇したことから、BoE議事要旨後の上昇がほぼ帳消しとなった。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と主な変動要因

	変化率	米日2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-1.2	-0.05	-0.05	-0.00	-0.15	-0.16	-0.01	+1.2	+1.4	+2.5	+2.2
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	+1.2	+0.07	+0.02	-0.05	+0.20	+0.04	-0.16	+0.6	+1.2	+2.2	-0.04
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
豪ドル/米ドル	+1.8	+0.05	+0.00	-0.05	+0.17	+0.01	-0.16	+0.9	+1.2	+0.3	+1.0
	変化率	NZ米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
NZドル/米ドル	+1.6	+0.05	-0.00	-0.05	+0.21	+0.05	-0.16	+0.9	+1.2	+0.3	+1.0
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+1.5	+0.10	+0.05	-0.05	+0.23	+0.07	-0.16	-0.2	+1.2		

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

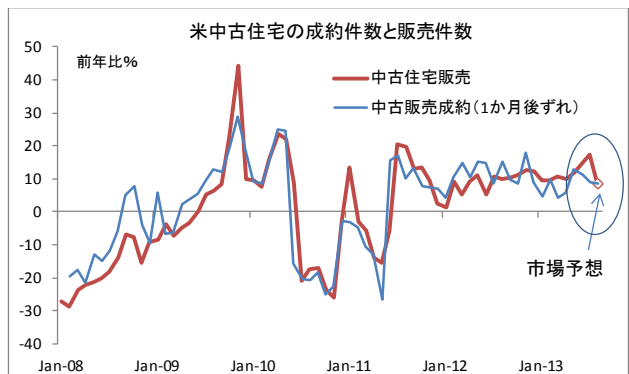
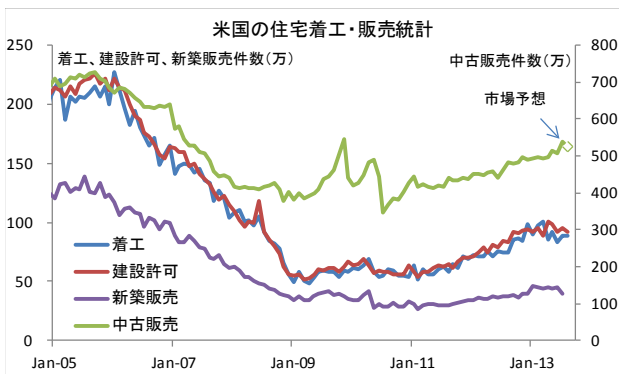
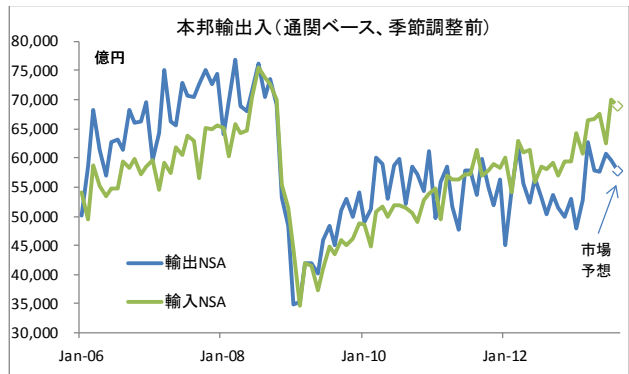
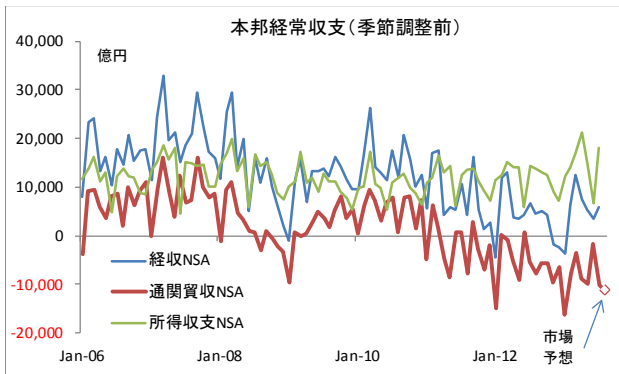
きょうの高慢な偏見：FOMC後の落ち着き処を探る

本日の相場材料としては、①NZ2QGDP(7:45、前期+0.3%、市場予想+0.2%、前期比)、②本邦8月通関貿易収支(8:50、前月-1兆279億円、市場予想-1兆1138億円、季節調整前)、③木内日銀審議委員発言(10:30、ややタカ派)、④スイス中銀金融政策決定(16:30、市場予想はユーロ/フラン相場の下限変更なし)、⑤英8月小売売上高(17:30、前月+1.1%、市場予想0.0%、除く自動車前月比)、⑥黒田日銀総裁発言(17:35、ハト派)、⑦米新規失業保険申請件数(21:30、前週29.2万件、市場予想33.0万件)、⑧米8月中古住宅販売件数

(23:00、前月 539 万件、市場予想 525 万件)があるが、昨日の FOMC 結果を引き続き消化する展開となろう。

ドル/円は、本日の日米材料はドル/円に強い方向性を与えるものとはなりにくく、FOMC 結果の余韻を消化する日となろう。FOMC 後のドル安円高が大きかったことから、短期ポジショニング面での買戻し主導で 98 円台半ばまで持ち直す局面もあるかもしれないが、目先すぐに資産購入縮小開始期待が再び高まるのは難しく、ドルを買い進める理由に乏しいことからドル上値も重く、再び 98 円割れもあり得、結局 98 円丁度を挟み落ち着き処を探る展開となろう。

本邦通関貿易収支は主に原油や液化石油ガスの輸入増を背景に赤字拡大傾向となっており、どちらかといえば円安圧力だが、ごく目先はシリア軍事介入懸念の後退により原油価格が反落していることから、今後の貿易赤字急拡大が懸念されている訳ではない(下図参照)。他方、米中古住宅販売件数は前月からの減少が予想され、米国の長期金利上昇下の住宅関連指標の頭打ち傾向の裏付けとなりドル上値抑制要因だが、販売統計に1か月ほど先行する中古住宅販売成約指数が示していた悪化と整合的な減少といえサプライズではない(下図参照)。また日銀高官発言についても、足許追加金融緩和が議論される状況にはない中で、円相場を動かすような内容は予想されない。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。

ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。